

採用面接場面における顔表情と対人不安の関係性

Relationship between facial expression and social anxiety on job selection interviews

高木幸子

Sachiko TAKAGI

E-mail : sachiko-t@ruri.waseda.jp

和文要旨

我が国には対人不安と表情の関係性についての知見は数多いが、それらが重要な意味を持つと考えられる就職における採用面接に関する科学的知見は非常に少ない。そこで、本研究では、顔表情と対人不安の関係性を擬似的な採用面接場面を用いて検討した。目的は、面接者の表情が志願者の印象および評価に関する見積りにいかなる影響を与えるのか、志願者の対人不安傾向の程度に応じてそれが異なるのか、さらには採用結果をどのように予測するのかを検討することである。結果から、志願者の対人不安の高低によって、面接者から返される表情および肯定的表情の呈示比率や志願者の回答が、志願者自身の印象評定の予測に異なる影響を与えることが示唆された。また、対人不安の高い者は面接者に好印象を与えられたと思っても、結果として不採用になると推測する傾向があることが示唆された。この理由として、対人不安が高い者は、他者への自身に対する期待を高く見積もることによって、失敗は必然だったというように評価の意味を曖昧にし、自尊感情を維持する傾向にあることが伺える。

キーワード：表情、対人不安、採用面接、自己呈示

Keywords : Facial expression, Social anxiety, Selection interview, Self presentation

1. 緒言

われわれの多くは、日常生活における対人場面において、不安や緊張を経験する。特に初対面の相手が多い場面、たとえば顔見知りの少ないパーティへの参加や、学会発表などで不安や気疲れを感じた経験を誰しも持っているだろう。さらに、自分が他者から何らかの評価を受ける場合にはなおさらである。このような対人場面における不安や緊張は、対人不安という概念を用いて研究が重ねられてきた。対人不安は人間行動の様々な側面に影響を与える。それは、言語的行動へはもちろんのこと、非言語的行動にも影響を与える。表情は、非言語的行動の中でも非常に重要視されており、心理学において多くの検討がなされてきた。本研究は、対人不安が生じる代表的な場面として採用面接場面をとりあげ、非言語行動である表情との関連を探ることを目的としたものである。

1.1. 対人不安

対人場面での不安や緊張に関する研究は、心理学において多様に検討され、スピーチ不安・シャイネス・あがり・コミュニケーション不安など、それぞれの領域において異なる専門用語を用いる傾向にあった。しかし、これらの用語は、対人不安という一般的な概念のもとに統合して考えることができる。対人不安が生じる原因を説明するモデルは、強化理論 [1],[2]、社会的スキル欠如説 [3]、認知的歪曲などのさまざまなアプローチから検討されてきた。これらの理論全体、その中でも特に認知的歪曲の理論を踏まえた上で、Schlenker & Leary[4] は自己呈示理論を展開した。自己呈示は、他者に対しある特定の印象を形成するために自分自身を調整することと定義されている [5]。自己呈示を通じて人が伝えようとする印象の性質は状況によって変化すると考えられるが、Leary[6]によれば、人はほとんどの場合に、他者